

史記に見る黄帝の問題 : 特に司馬遷の黄帝の取り扱ひ方を中心として

著者	安居 香山
著者別名	YASUI K.
雑誌名	漢文學會々報
巻	14
ページ	15-19
発行年	1953-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00146394

(因にこの小論は昭和二十七年年度の文部省科学研究費による助成研究成果の一部である)

注一 東北大学支那学研究室編「百子金書人名索引」による。

注二 十七史商榷、卷六、司馬氏父子異尙。

注三 東觀漢記、卷十二、諸子。

注四 漢書藝文志講疏、諸子略、道家。

注五 憲齋集古録、釈文贖稿下巻。

注六 兩周金文辭大系、考釈下篇。民国二十五年、文求堂刊。

注七 金文篇、続金文篇による。

注八 集刊第三本第四分、丁山銘文考釈引、翁祖庚説。

注九 觀堂集林、初集卷十八、史林十。

注十 中国上古史導論、二、黄帝与皇帝及上帝。

注十一 金文叢考、周彝銘中伝統思想考、一宗教思想。

注十二 禹貢半月刊、三ノ一、錢穆、黄帝故事地望考。

注十三 觀堂集林、初集卷十、史林二、殷周制度論。

注十四 北方圈、創刊号、佐藤匡玄氏黄帝論。

史記に見る黄帝の問題

——特に司馬遷の黄帝の取り扱ひ方を中心として——

安 居 香 山

史記に見る黄帝の問題の中、

① 司馬遷の黄帝の取り扱ひ方

② 黄帝説話よりみる史記の黄帝が、大きなものとして考へられよう。

前者は編者としての司馬遷が、黄帝をどの様に取り扱つたかと言ふ彼の黄帝観に基づく資料の取り扱ひ方の問題であり、後者は、黄帝説話上より、史記の黄帝が資料的によどの様な問題を持つてゐるかと言ふことである。

前者については、別に史記黄帝本紀考(副題—本紀の構成分析よりする司馬遷の立場の考察)(註一)として、本紀の内容分析よりして一考して置いたのであるが、此処に於ては、これと關聯しつつ、更に史記全般に見る黄帝を考へる事に依り、司馬遷が黄帝をどの様に考へ、又それをどの様に史記に取りあげて来たかと言ふ点について考究してみたい。

○ 司馬遷の資料の取り扱ひの慎重さは、(此処に彼なりの合理的立場があるのであるが)、例へば五帝本紀の末尾の太史公贊一つを取つてみても知られる。

即ち、古文獻の比較考量、实地踏査、古老等よりの資料蒐集及びその考量、或は

非好學深思、心知其意、固難為淺見寡聞道也、余辯論次、擇其言尤雅者。

と言ふ如き眞學な学的立場は、資料に対する彼の慎重さを示してゐる。従つて、黄帝を取り扱ふに當つても、同様な態度がとられたことは言ふまでもない。

黄帝に関する資料が当時極めて豊富であつたであらう事は、史記の各所に黄帝に関する記載がある事、呂覽・韓非子・淮南子等、史記以前或は同時頃と考へられるものに多くその記載のある事より推考され

る。又

竇太后好黃帝老子言、帝及太子諸竇、不得不讀黃帝老子、尊其術。

(外戚世家第十九)

とある如き、或は、武帝の封禪に関する諸事の如き当時の風潮、更に、

陳丞相、少時本好黃帝老子之術。(陳丞相世家 第三十六)

田叔者、埴陘城人也、其先齊田氏苗裔也、叔喜劍、學黃老於樂巨公所。(田叔列傳 第四十四)

王生者、善為黃老言、處士也。(張敖之馮唐列傳 第四十二)

その他、鄒堂時(汲鄭列傳第六十)、鄧章(袁盎傳錯列傳第四十一)等、當時の黃帝、老子への異常なる関心を見るるとき、その内容はともかくとして、黃帝に関する資料は極めて豊富であつたに違ひない。

而も之等は、今日見る如く、心ずしも一貫した黃帝説を傳へて居らず、その上、當時にあつては、燕齊の方士達が封禪に關聯して持ち出す黃帝説が混入して、時代を大きく支配していたのであり、之等を資料として黃帝説を史記中に構成する事は、その資料の取捨選択に於て極めて難しい事であつたに違ひない。特にその時代に生きながら、客觀的立場を取ると言ふ事は猶更至難である。

かうした中であつて、司馬遷はどの様に整理し、どの様に史記構成の中に折り込んで行つたであらうか。

黃帝に關して最も纏められている黃帝本紀と封禪書とを比較するとき、その中に同類資料(註二)もある事が知られる。然しこの兩者は、内容上からも、記述形式上からも、全然趣を異にしてゐる。

内容的には、本紀のが人皇としての黃帝であるとすれば、封禪書のは多分に神仙化された黃帝であり、前者が史上の古帝王として書かれているのに対して、後者は黃帝について語り傳へられ、又現に語られ

つゝある事の歴史的記録であり、特に此處では封禪と關係せしめられ

た黃帝である。又形式的には、前者が本紀と言ふ傳記形式の中に收められているのに対して、後者は書と言ふ形式の中で、文化事象としての封禪についての編年体の中に收められ、而もそれ等は、殆んど第三者の言としての形式の中に入れられて居る。

かうした資料取り扱ひの中には、当然何等かの理由が予想せられねばならぬのであり、事實この事は、その取り扱ひの中に見られる。

そして更に之を推究して行く時は、かうした取り扱ひを為さしめた根底的理由としての、彼の黃帝觀や、更には史觀までが、考へられて来る。

右の如き内容、形式の相異は、後世正史の基本形式を左右した所の本紀・年表・書・世家・列傳と言ふ諸形式が、黃帝の記述に於ても決定的な立場を取らしめたと先づ考へられよう。而もこの形式が「世界史の概念を言を以て述べる代りに、史記の構造を通して具體的に世に示した」(註三)と言はれる如き、彼の史觀に基づくものとすれば、黃帝觀も亦、この形式の中に已に規定せられて居ると言い得よう。

即ち、夫々の形式の中に、その形式相応の黃帝説を選ぶ事により、資料整理を可能ならしめたと言へる。

然しながら、これ等の形式は包括的な形式であり、この形式の中に如何なる内容を折り込むかと言ふ事は、又夫々の内容に対して彼の立場が要請されて来る。従つて、多くの資料中より取捨選択するについては彼なりの黃帝觀がなければならぬ。

資料的に見るとき、本紀の基本資料は、

孔子所傳宰予問五帝德及帝繫姓、儒者或不傳。

とある如く、帝徳・帝繫を根幹とし、之に左傳、國語等の諸資料を附加し、更に當時云々せられる黄帝說中より、古帝王として、又人皇黄帝として妥當且つ必要と認められる資料を以て、一連の黄帝傳記が構成されてゐる。

之に対して封禪書は、主として封禪に關聯して出て来る黄帝說を、始んど「或曰」「誰々曰」「何々曰」と第三者言の形式を以て、時代順に配列されてゐるにすぎない。これ等は内容的に極めて雑多であり且つ彼の立場を離れた客観的な事實の羅列に過ぎない。(註四)そして黄帝の性格は、多分に神仙的性格を持つてゐるのである。

かうした資料の取り扱ひについて Charvannes は、(註五)

「尨大な傳説系統の中心たる有名な黄帝も、司馬遷にとつては、單に普通の一帝王に過ぎなくなつてゐる。眞実を描かんとして司馬遷は傳説を變形し、本質的に非實在的、観念的なものに、實在らしき外見を与へたために、其の結果は荒誕な通俗的信仰よりも一層虚構なものになつてしまつた。」

として、「低度の合理主義」と批判してゐる。

この見解には一理あるとしても、かうした峻別の中にこそ、実は司馬遷の資料に対する立場があるのである。

即ち彼にしてみるならば、黄帝は史上厳然と存在する古帝王であり五帝の第一に置かるべき人皇としての黄帝である。本紀に示された黄帝はこれであり、決して「虚構」ではない。然るに当時燕齊の方士達は、みだりにこの黄帝を取りあげ、更には之に神仙的性格をも附与して、封禪に關聯せしめて説いた。かうしたものをこそ、彼にとつては、「虚構」であつた。然し歴史的事實は、現にかうした黄帝を語らしめて居る。とするならば、事實を無視し得ぬ彼の立場として、これ等を封禪書中に羅列する事は当然である。こゝに黄帝の取り扱ひについて、封禪書が本紀と異なる所以がある。

勿論、方士達の言ふ黄帝說が総て虚構であると考へたと言ふのではない。その証拠に、「封禪與爲多焉」「獲寶鼎」「迎日推策」「順天地之紀」等(註五)、封禪書に見える同類資料が本紀中に取られて居ることも知られる。しかしながら、李少翁、樂大、公孫卿等の方士の言を、「無驗」「無效」と、その説の根拠無きことを忌憚なく指摘した彼が、同じく彼等の言ふ黄帝說をそのまゝ信ずる筈がない。彼が本紀贊にある如き慎重さを以て、資料に臨んでゐる事は又当然である。

かく考へ来るとき、黄帝本紀は、單に本紀と言ふ形式にのみ制約せられて構成されたものではなく、その形式に基づいて、彼の考へる黄帝傳記が構成せられたものと言ふ事が出来よう。これに対して、封禪書に見える黄帝說は、必ずしも彼の考へるものではないとしても、當時までに語られた諸說を、封禪に關聯しつゝ纏めたものと考へられる。そして、かうした立場を峻別する一つの形式として、封禪書では出来得る限り、客観的な記述をし、第三者言を以てしたと言ふ事が出来る。従つて封禪書も、書と言ふ形式にのみ制約されたものではなく、自ら其処には意図するものがあつたのではあるまいか。

○

果して然らば、上掲の如き峻別を為すべき根拠を何に求めたであらうか。換言するならば、彼の黄帝觀を決定する根拠を何に求めたであらうか。この事はその資料を分析する事により知り得られる。

即ち本紀の基本資料が、帝徳、帝繫、春秋、國語等であつたと言ふ事は、堯、舜紀を尙書、孟子等を根幹としたと同様、之等が、彼の資料觀よりすると、史的に確かな古典資料であつたと言ふ事である。従つて史的に確かな黄帝資料も、これ等古典資料に依つて、始めて得られるとしたのであらう。故に、彼の黄帝觀は、この資料觀により先づ規制されたと言ふ事が出来よう。

多くの問題を持つ五帝配当の問題も、彼が黄帝、顓頊、帝嚳、堯・舜

としたのは、五帝徳を基本資料にしたと言ふ事が決定的な立場を与へたものである、と言ひ得よう。

勿論当時、

學者多稱五帝尙矣、然尙書瀾載堯以來、而百家言黃帝、其文不雅馴、薦紳先生難言之。

とある所よりするならば、尙書にさへ無い黃帝を、五帝徳に基づいて取りあげる事には、多くの困難もあつたであらう。然し其処には、彼自身の考量よりして無視すべからざるものがあり、又そうしたものを取りあげる事に、時代的要請と言ふものがあつたといふ事は否定さるべきでない。(註七)

然し、本紀は単に前述する如く、帝徳・帝繫のみを資料として居らず、封禪書に見る如き同類資料を附加してゐる。更に帝徳、帝繫そのものさへも、そのまゝ受け入れられて居らず、嚴密に取捨選択されてゐる。かうした内容に対する分別は、実に司馬遷自身の黃帝観に基礎を置くものである。

即ち帝徳に見る「黃帝三百年説問答」を抹殺し、「乗龍駕雲」の如き神仙的黃帝を捨て、「黃帝が少典の子である事を明言し、しかも玄鳥巨人の瑞の加へられない事」(註八)等は、司馬遷が黃帝を考へるとき、人皇としての性格にはこれ等は神秘的であるとすむ黃帝観に基づき取捨選択したものであらう。

又「黃帝」、「獲寶鼎」、「迎日推策」、「順天地之紀」、或は炎帝、蚩尤との戦ひに関する諸資料及び天下統治の諸施策に関する記録等は、少くとも彼が考へる古帝王としての黃帝傳記を記録するに必要且つ妥当と考へられた彼の黃帝観に基づく取捨選択の総てである。従つて彼の黃帝観も、又かうした取捨選択の中に於て、始めて明瞭に理解せられ得るものである。

勿論、時代の子である彼が、唯彼の史眼に於てのみ、この黃帝観を持ち得たとは言ひ得まい。否、寧ろ彼の史眼も亦その時代の中に養成せられたもの故に、五帝徳・帝繫姓に依つたと言ふ事も、又その他諸資料を取りあげたと言ふ事も、その時代の要請、その時代の史実判断の基準を示して居るに過ぎぬとも言ひ得よう。而もなほ、彼が封禪書の如き諸の黃帝説を離れて、かうした黃帝本紀を構成し得たと言ふところに、彼独自の史眼に立つ黃帝観の存在を認めざるを得ぬものである。

以上は、主として黃帝本紀と封禪書とを中心として、史記の黃帝についての司馬遷の取り扱ひ方を見つゝ、又彼の立場も明らかにして来た。そしてかうした考察は、本紀、封禪書を比較する事により、最もよく理解せられるのであるが、黃帝に関するものは、これのみでなく史記全書に亘つて見られるものである。そして、彼の黃帝の取り扱ひは、更に別な資料をも併せて考へらるべきであらう。然しながら、他の断片的資料は、充分これが用に供し得ない。

更に、かうして見た黃帝の問題も、司馬遷の時代に於ける理解の基礎に立つての諸判断であつて、今日吾々が説話上の人物として見る黃帝としての立場からは、本紀、封禪書その他の諸資料の分別も、総て一括して黃帝説話の資料としてのみ、取り扱はれ得るに過ぎない。

故にわれわれが、此処に於て角度を換へ、史記の諸資料を説話資料とし、更に当時に於ける黃帝の諸資料と比較考量するならば、司馬遷の取り扱ひ方は一層明瞭にされるであらう。此処に、「説話資料としての史記黃帝の問題」(註八)が掲げられる理由がある。

(この小論は昭和二十七年年度の文部省科学研究費による助成研究成果の一部である。)

(註一) 大正大学宗教文化第十一輯掲載予定。

(註二) 「封禪」「獲寶鼎」「迎日推策」「順天地之紀」等 (詳しくは

史記黃帝本紀考にある)

(註三) 重沢俊郎「司馬遷の研究」(周漢思想の研究 p. 282)

(註四) 史実に対する主観的批判は極めて簡単であるが「無驗」「無效」

とか、或は「天子益愈厭方士之怪迂語矣、然羸縻不絶」等の形、又諸方士の盛衰の記述の中に見られるが、封禪書全般の構成は、客観的な記述である。

(註五) 史記著作考(岩村忍訳 p. 112)

(註六) これ等の資料比較は、詳しくは「史記黃帝本紀考」にある。

緯書における黃帝について

中 村 璋 八

(註七) この事について岡崎氏(司馬遷と班固、史林第十七卷三号)は

司馬遷の立場を極めて消極的に認めて居られるが、私は平岡氏(五帝本紀の新研究、支那学、卷八 p. 153)が「周末秦漢の大統一統帝国の意識から生まれた国家史的反省が、以て中華の始祖たるべきものと観せしものであつた」と言ふ資料取扱ひに対する積極的立場を認める。

(註八) 前掲、平岡氏説 (p. 145)

(註九) この点については、紙数の関係にて次の機会にゆづる。

一

緯書は個人の述作ではなく、又或る限定された時代の創作でもなく、その中には戦国以来の九流百家の説が混入している。(一)即ちそれら諸家の經典乃至傳説の一種の解説がまとめられたものではあるが、現存する緯書は、漢以後の文獻が各々の立場で引用した断片的佚文を收輯したもので、それが如何なる性質の解説であるか明確ではない。かゝる緯書を同一資料として扱ふことは危険であり、これを対象とする場合は、一つの全体として見るという假設がなければならぬ。併しそれが緯書と総括される以上、全く不統一な、断片的記事の集合体ではなく、或る時代の、或る共通の意図を持つ集團の人々が、何等かの目的を以て作成したものであり、或る体系を持つと思われ

る。試みに、緯書を検すると、古代帝王の傳説が極めて豊富であること

に氣附く。今それを列挙すると左の如くである。()内は回数を示す
伏羲(36) 燧人(8) 女媧(3) 神農(17) 黃帝(91) 少皞(3)
顓頊(10) 帝嚳(5) 堯(57) 舜(28) 禹(21) 以下略 (二)
これ等は、現存緯書全体において、決して輕視出来ない部分を占めている。特に黃帝に関する傳説は多い。そこで緯書の黃帝を把握することは緯書が、如何なる体系を持ち、如何なる意図によつて作成されたかを知る一つの手懸りとなるのではなからうか。

二

黃帝傳説は、九十一条もの多きに達するが、それを類別すると、左の如くなる。(数字は回数)

(一) 黃帝名軒、北斗黃神之精、母地祇之女附寶、之郊野、大電繞樞斗星耀、感附寶生軒轅。胃文曰黃帝子。(河圖握矩起、御覽七十九引)